4-4　座談会（歴代課長、歴代次長）

(1) 第1回歴代課長座談会
(2) 第2回歴代課長座談会

まちセンで現場の最前線の指揮者である課長職を長期間経験された6人の方々に、以下のとおり2回にわたってお集まりいただき、歴代課長座談会を開催しました。

各回ともまちセンのOBや現役スタッフも含めて約30名が参加し、当時の指揮者たちのお話に耳を傾けました。

京町家の調査、専門家の派遣、セミナーの企画など、財団設立以来の事業の数々と、それにまつわる苦労。京町家まちづくりファンドや、京町家カルテといった新事業を創りつつ、相談業務をこなし、地道に信頼関係をつくっていくことが大切。何でも新しいことを始めるのは、エネルギーが必要。それでも、まちセンは時間をかけて、地域の人や専門家など様々な人と関わって、ネットワーク型の組織として成長してきた。などの振り返りのお話と、併せて、これからのまちセンの進むべき道などついて示唆に富むお話を聞かせていただき、和やかな中にも勇気を与えていただく貴重な時間となりました。

(1) 第1回歴代課長座談会

■日　時　平成29年9月5日（火）19：00〜21：00
■場　所　まちセン　ワークショップルーム
■座談会御出席の方々

出席者名	所属（現職）	所属（当時）および在任期間（在任期間順）	
谷口　一朗氏	都市計画局都市景観部土木担当部長	事業第一課長	平成16〜18
中島　吾郎氏	都市計画局建築指導部建築安全推進課 既存建築物対策担当課長	事業第一課長	平成19〜22
森川　宏剛氏	NPO法人京都景観フォーラム専務理事	事業第二課長,事業第一課長	平成22〜25
進行：上田　菜穂	(公財)京都市景観・まちづくりセンター事業第三課長		

(2) 第2回歴代課長座談会

■日　時　平成29年9月6日（水）19：00〜21：00
■場　所　まちセン　ワークショップルーム
■座談会御出席の方々

出席者名	所属（現職）	所属（当時）および在任期間（在任期間順）	
髙木　伸人氏	都市居住推進研究会事務局長	事業課長	平成10〜13
北川　洋一氏	産業観光局観光MICE推進室担当部長・ 京都市観光協会事務局長	管理課長	平成16〜19
髙木　勝英氏	都市計画局建築指導部建築指導課長	事業第二課長	平成17〜21
進行：西井　明里	(公財)京都市景観・まちづくりセンター事業第一課長		

(1) 第1回歴代課長座談会

担当事業の概要と思い出

早速ですが、それぞれまちセンでやってらっしゃった事業を、内容ですとか、関わられた地域とかについて具体のお話をお伺いできればと思います。

○谷口一朗氏

谷口一朗氏

地域まちづくりを受け持つ、事業一課の課長を務めました。まちセンが龍池小学校から現在地に引っ越して間もない頃で、景観まちづくり大学などのセミナーが数多くありました。こうしたセミナーの運営のほか、都市計画の制度である地区計画も含めた地域まちづくりの支援をしていました。

地域活動がうまくいかず、どうサポートしたらいいのか迷ったこともあります。支援できる年限は限られているから、少しずつ手をひかないといけないのに、地域の方からは「あんたらが言ったから、やり始めたんや」と責められるような気配を感じたことも。専門家派遣については、そもそも地区計画や建築協定を目指した京都市の制度をまちセンが引き継いだものの、実績はなく、最初は大変でした。

それでも幸い、新門前通西之町（東山区）の地区計画などの仕事ができました。マンション反対運動が起きていた洛西ニュータウンのテラスハウスに関わった時は、話のわかる役員さんにご協力いただきました。納屋町商店街（伏見区）では、役員さんが地権者一軒一軒を回って説明してくださり、地区計画が実現しました。地域の自力、地元としての力量や覚悟に目配りしながら、コーディネートする力が必要だと思いました。

あと地元の方だけではなくて、企業も一緒にまちづくりに参画してもらうことが非常に大事だという思いを持ちながら、３年間を終えたということが実感です。

○中島吾郎氏

中島吾郎氏

谷口さんの後、事業一課長を務めました。谷口さんたちのおかげで、まちセンが地域から悩み事相談を受けることも増えていました。

ルール作りまではいかないけど、まちづくりを盛り上げたい「醸成期」に何をしたら良いか、よく議論しました。商店街や中小企業の方からも、地域に貢献したいという方から、まちづくりを盛り上げるため何かできないかという話をいただきました。セミナーの講師にお呼びしたり、学生まちづくりコンペで学生とマッチングしたりしました。テーマによっては、その中小企業や、商店街の方が資金提供を含めた協力をしてくださったこともありました。

また、京阪神のすまいまちづくりの関係者が知恵を共有してはというお話もいただき、三都市の連携したセミナーを始めました。ネットワークが広がった、一つの成果かなと思います。

○森川宏剛氏

森川宏剛氏

都市計画コンサルタントを経てまちセンのコーディネーターになり、５年ほど働いた後、事業第二課長、一課長を務めました。コーディネーター時代も含めた９年の体験から、まちセンの事業の根幹は「まちづくり相談」と「京町家何でも相談」だと思っています。

谷口課長からは「利用者の方に、まちセンに来たら何とかなった、と思ってもらいたい」と言われました。話を聞いて、心をほどくところから始めて、ちょっと前向きな気持ちになって帰ってもらおうと心を砕きました。

相談に丁寧に対応すること、その積み重ねの中で、地域や市民からの信頼感を得ることがまちセンにとって大切です。その信頼があるから、行政や事業者もまちセンを信頼し、何か一緒にやろうという話も出てきましたし、情報もたくさん入ってきました。

私は多い時、年間１３０件程度の相談対応をしていました。コミュニケーションの基礎を作る良い機会でした。私も含めて、コーディネーターは、相談によって育てられたことが今頃になってわかりました。

事業を進めるうえで配慮したこと

事業課長として、まちセンの職員として、皆さんが関わられた事業の中でのご苦労や、工夫をされてきたこと、心掛けてこられたことはどういうことだったでしょうか。

○谷口氏

地域でのまちづくり活動に対して先入観を持たないことを心掛けています。「地元の人がまちづくり活動を活発にすることが是だ」とか、そういう先入観を持つと、失敗するんじゃないかと、自分を戒めています。

○森川氏

その地域の主体性を大事にするとか、主体性を育むとは、具体的にはどうすることなんだろうと、すごく悩んだ記憶があります。答えがぴしっとあるわけではないが、じゃあ、大事にするってどういうことなんだろう。今現実のこの場面でどういうふうに接することが、こちらがどういう言動をすることが相手の主体性を尊重することになるのかっていうことかは、常に議論していたし考えていたように思います。

○中島氏

やっぱり、具体的に何か１回動かしてみないとできない。どういうことが皆さんにとって発火点になるのか、探りながらやってきました。

○森川氏

まちセンという組織はネットワーク的な機能を持つ一方、ピラミッド型の性格もあります。課長は、ネットワークとピラミッドの接点にいる存在。コーディネーターから課長になった私は、組織のマネジメントを適切にする一方で、どうすれば自分の下のコーディネーターに、できるだけ自由に、いきいきと動いてもらえるかを考え、その両立がとても難しかったです。

○谷口氏

まちセンは、意思決定が早く、非常に動きやすい環境がありました。それは強みだと思います。自分が動きやすいと、コーディネーターに対して、好きにやっておいでと言う余裕ができました。当時、コーディネーターは３年限度の採用でした。３年間で、地域との付き合い方も含め、色々学んでほしいと思っていました。そんなにきちんとした思いで人を使っていたわけではないですが、私自身が動きやすかったということが人を使ううえで大きかったと思います。

図4-4-1　第1回歴代課長座談会の様子

まちセン業務の面白さ

私も市の職員の立場としてまちセンに来ていますが、市役所で行うまちづくり支援と違う部分で、まちセンだからこそ何か感じられたおもしろさとか喜びなどがあればお聞かせください。

○谷口氏

京都市にいた時は、市の施策の中で自分のミッションが決められていました。まちセンはもっとフレキシブル。センターの方向性に合った目的を考え、それを達成する中で成果を獲得します。面白いこともしんどいことも紙一重です。

まちセンには、地域の人の悩みを聞き、それを解決することを手伝う喜びがある。目的は、京都市にいた時のように明確ではありませんが、自分で見つけた仕事ができるし、勝ちとった時の喜びがありました。

○中島氏

都市づくり推進課にいた時も、政策目標の達成を目指していれば、目標に密接ではなくても、関わっている地域の人たちの幸せにつながるような取組を、割と自由にさせてもらいました。まちセンでは、さらに、地域のため、まずトライしてみるということに寛容で、広いテーマ設定や動き方をすることができました。学んだことは多かったです。

まちセンならではの役割

まちセン内部の変化として感じられたところ、専門家派遣でのご苦労やご感想、特に関わられた事業の中で、まちセンがこういう役割を果たせたなとか、果たしてきたからそれができたなと思われているところなどについてはいかがでしょうか。

○森川氏

まちセンができた頃、こういう中間支援組織のような存在は、あまりなかったように思います。今は区役所が市民向けの総合窓口的な存在感を高め、まちづくりアドバイザーも登場して、まちセンに求められる役割は変化しつつあります。ファンド、カルテ、景観・まちづくり大学など、事業を拡大するにつれ、こなすのが大変になっているようにも見えます。

人に仕事をつけるのか、仕事に人をつけるのか。以前のまちセンは人に仕事をつけていた感じがします。自分なりの仕立てができる時期があった。だんだん、仕事に人をつけることが増えているようです。仕事に人をつけるという形をとるのなら、そうだと自覚して、継続性も考えないといけないでしょう。

○中島氏

当時のことを思い出すと、やっぱり楽しかったと思います。京都にとってプラスになると提案すれば挑戦でき、お互いに刺激しあえるメンバーにも恵まれて。自分の中で今でも財産だと思います。

行政も含めて、京都の色々なまちづくりの中で、地域環境を大事に思い、守る人たちがいることが財産だと思います。それらの財産がいかせるよう、まちセンの地域支援を、今まで以上に発展させて継承していただくことが大事ではないでしょうか。参考になるような以前の取組があれば、背景や担当者の思いもお伝えする形で、現役メンバーの人とも意見交換等できたらいいなと思います。

○森川氏

まちセンは専門家のネットワークができれば、仕事の半分は終わりと言われていましたが、その専門家のあり様は、多様な形があってよいと思っています。例えば、企業の人が得意技をいかして、何か手伝うというような。色んな分野、領域から、少しずつ持ち寄るようにして、まちづくり支援のネットワークが多彩で重層的なものになればよいと考えています。ただ、専門家は、地域の主体性を大事にすること、まちづくりの文脈に沿って支援することなど、基本的な考え方がとても大事。そういうことを身につけた人を増やすのが重要だと思います。

○中島氏

マンションの地域共生の場面では、地域と一体感を感じられました。当時のまちづくりコーディネーターの田中さんと一緒に町内会に入って、協議の場で事業者と何をしゃべるかという話をしました。行政の施策の範囲を読み解き、事業者にこ

こまでやってもらいましょうという。それはまちセンならではの仕事でした。

○谷口氏

困った中で、センターを訪ねてこられる。あるいは、こちらが呼ばれる。そういう時は、相手の話をきちっと聞いてあげて、できることはしてあげる。そういうスタンスで色々な地域に対応するのは、まちセンだからこそできる役割です。小さな積み重ねが、土台の部分になっていくという思いで、いつも接していました。

○森川氏

マンションの問題の影で、地域コミュニティが分断されることがよくあります。住民の温度差の扱いを間違えると一気に溝ができるので、注意して相談を受けていました。そういう相談の受け方をできるのは、まちセンならでは。相談がうまくいって問題が起こらなくても、起こらなかったことは成果として見えにくいし、評価はされにくい。でも、地域にとって必要なことだと思います。

質疑応答：まちセンのこれから

そういったマンションの相談なども、問題が起こらなかったことを成果として出しにくい。成果にはならない黒子的な役割が大きいというのは感じるところです。やはりまちセンとして何をやっているのかもっと明確に出していかないといけないのではと悩んでいるコーディネーターもいると思います。現役の方から何か質問、意見はありますか。

○牧野氏

まちセンの役割は、時代時代で変わってきました。まちセンが果たすべき今後の役割、地域の方々に求められていることについて、それぞれのお考えを聞かせてください。

○寺田氏

地域の主体性を尊重するということはどういうことだと理解をして、その上で、どのような取組をすべきか。それと、地域まちづくりと地域共生の土地利用が二本立てで動いていることと地域の主体性についてとの関係性の中で、牧野さんの質問はあるのだと思います。

来し方、行く末のお話しの中で行く末の方のお話として事業課長の方々の御意見も聞けると大変ありがたい。

○谷口氏

できるだけ地域発意で、役所じゃない中間領域にいる者として、自分がこだわってやりたいことを見つけて突き詰めていくことができるのが、センターの魅力でした。今の現状を見て、「やっぱり、これやるべきちゃうの」「こんなこと役所にはできへん」「俺がやったるんや」という思いをもってやっていってほしい。

○中島氏

行政の一分野だと、自分の守備範囲を超えた広い範囲のマネジメントがなかなかできません。守備範囲の広いセクターの良さをいかして、まちの様々な情報もつかみ、色々な取組の提示もしていくうちに、次の活動の芽が出るのかなと思います。

○森川氏

相談で多くの情報が寄せられる。今だったら民泊の話とか、地域の最新の問題が寄せられるはずです。その変化にうまく対応していくことではないでしょうか。

まちセンは、あまり事業を抱えず、柔軟な状態で軽やかにいてほしい。課題解決の事業そのものは、まちセン自体が担うわけじゃなく、ネットワークのコアにまちセンがいます。まちセンそのものが頑張らなくても、周りが成果をあげてくれて、それがまちセンの成果になる。変化に対応しながら、周りがやりやすくなるように、支援できればよいのではないでしょうか。

(2) 第2回歴代課長座談会

担当事業の概要と思い出

まちセン在籍中に印象に残っていることや、在職中の事業についてお話をいただきたいと思います。

○髙木伸人氏

髙木伸人氏

平成１０年から１３年まで事業課長を務めました。平成８～９年頃の京都市は、まちづくり、パートナーシップ、市民参加という言葉が一般の職員にもちらちらと聞こえるような状況で、色々なプロジェクトが立ち上がっていた時期でした。一方で、阪神淡路大震災の復興の現場では、時に行政の思惑と、住人の思惑が、ぶつかり合っているような状況もありました。

私はまちセンに来て、最初に町家の調査を手がけたのですが、最初は訳が分かりませんでした。その上、寺田さんからは、センター職員たる者はどういうことをしなきゃいけないとか、どうあるべきだとか、どんどん仕掛けられます。

そうした中、現場に出て調査していくと何軒あるということだけでなく、町家の生活やそこに培われた京都みたいなものが次第に見えてきて、仕掛けられたことが一つ一つ腑に落ちてきました。そんな経験が非常に印象深いです。

町家に関わるボランティアの人は、専門家も含めて色々な思いの方がいて、同じテーブルについてもらうのには苦労しました。行政をやめて１０年になりますが、おかげで、その人たちとは今もつながっています。今後もそのネットワークを大事にしたいと思っています。

当時は、自治連の会長さんのところへ「まちづくりしませんかと」と投げかけても、ぽかんとされました。世代交代を仕掛けて、若い人たちに、まちの自治を担ってもらおうとしましたのですが、けんもほろろな学区もあれば、「よう来てくれた」という学区もあって、非常におもしろかったです。

また、企業の方々と手を組み、まちづくりに資する住宅の設計コンペなどもやりました。

○北川洋一氏

北川洋一氏

まちセンの黎明期には、まちセンフレンズという応援団みたいな市民の組織があり、私もその一員でした。まちづくりや、市民参加ということを意識するようになったきっかけは、仕事で嵐山の公衆トイレ整備を担当したことです。住民参加でワークショップをやりながら決めていく事業を担当し、まちづくり、市民参加って何だろうと考えるようになりました。それが平成７～８年の頃。しっかり学びたいと思い、まちセンフレンズのメンバーになりました。

私がまちセン管理課長で来た平成１６年は、龍池小学校からの引っ越しが終わって半年強経った時期でした。龍池時代のまちセンは、まちづくりや市民参加に関わることに、何でも突っ込んでいく気概で仕事をしていました。しかしこの頃のまちセンは、ひと・まち交流館に念願の拠点を得たものの、施設管理やセミナーなどの仕事が一気に増え、それに追われている状態でした。龍池時代に作った、地域やＮＰＯ、企業との関係を継続し、深めていくことに割ける時間が少なくなったというのも、実情としてありました。

施設という拠点を持ったまちセンを、どういうふうに運営していくのか考えなければならない過渡期だったのかなと思います。最初の１年は、委託事業の内容を絞り込み、業務の見直しをして、何とか本来のまちセンが持っていたフットワークの良さや、地域の窓口機能が回復できるように奔走し、京都市とも随分話をしました。

区役所改革の計画づくりを前の仕事でやっていまして、私がまちセンに異動してきた年、区役所にまちづくり推進課ができました。区役所が広く、地域やまちづくりに関わっていくというようになりました。

あの頃が過渡期だったという要素はこれも大きく、まちセンはこれからどういう役割を担ったらいいんだろうというのが、大きな課題でした。まちセンの強みをどこに見出していくか。つまりまちセンにしかできないことは何か、です。

都市計画の手法を使って、地域の問題を解決していくノウハウは、まだ区役所にありませんでした。まちセンが強みを発揮できるのは、都市計画的な視点や知識を持ったコーディネーターが地域まちづくりを支援することです。例えば、地区計画などの手法を使い地域のまちづくりビジョンをつくる、あるいは町家の再生を切り口にそれを地域に広げるなどの方法で、まちづくりをサポートすることでした。まちセンの強みとして、この辺を今後いかそうという方針を、中期経営計画の中に盛り込むことに取り組みました。

○髙木勝英氏

髙木勝英氏

平成１７年から５年間、事業第二課長を務め、町家のことを中心に担当していました。幾つか事業を紹介をさせていただくと、第３期町家調査は、平成２０～２１年に、ボランティアの皆さんに参加いただいて約１００日間、毎週土日にやりました。この調査を始めるきっかけは、立命館大学の矢野桂司教授より、第１期の町家調査、第２期の町家調査をふまえ、皆が使えるようなデータベースを作りたいとご相談を受けたことでした。建築物のストックマネジメントのシステムの構築ということで、予算要求を行いましたが、まずは悉皆調査の費用のみが予算化され、第３期調査では４万８０００軒の調査をしました。

それから、立命館大学のリム　ボン教授がニューヨークで町家を宣伝しませんかと発案されたことから発展して、ニューヨークでシンポジウムをやりました。そこでワールド・モニュメント財団と出会い、ウォッチリストの申請が通って、支援も得られるようになり今に至っています。

まちセンの人づくり

まちづくりセンターの設立からずっと根底にあります理念として、信頼・交流・創造という３つのキーワードがございます。

まずは信頼というところで人づくりということについて、当時課長として心がけておられたことをお話いただければと思います。

○髙木(伸)氏

地域に出て行くと、次が育っていない。これからの自治を発展させていくために、「若い人を見守り、もっと経験させてあげてくださいよ」とお願いしていました。偉そうに言っていましたが、当人は若い人と一緒に走り回っていて、課長職として次の人を育てようという意識はあまりなかったですね、自分は相当厳しく育ててもらっていたんですけども。当時一緒にやっていた人たちが今活躍されているのは、僕が育てたのではなく、組織の中で育ったんだと思います。

○北川氏

人材育成に関して元々まちセンにあった基本コンセプトは、まちセンで人を抱え込むのではなく、まちづくりに有能な人材を育て、社会にどんどん輩出していくんだと。つまり人材のインキュベーターになるというものでした。とはいうものの当時、まちづくりコーディネーターは２年で雇止めで、果たしてたったそれぐらいでものになるのか、非常に疑問でした。そんな思いから、雇止めの枠を取っ払うことを一生懸命やったのが印象に残っています。

まちセンは、仕事が人についてくるみたいなところもあります。それがその人と一緒に出ていっちゃうということは、社会のためにはいいかもしれませんが、まちセンとしては大きな損失。地域との関係性やノウハウが、その人ごとまちセンの組織から離れることは、組織として考えた時に弱みです。市の職員は３～４年で市役所に戻ってしまう。ここにずっと居続けられるような、軸になる人を作っていかなくてはと考えました。そこで、それまで市職員のものだった事業課長のポストに、まちセンで採用した人をつけようと京都市とも話し合いました。実現したのは私がまちセンを離れてからでしたが。

○髙木(勝)氏

市の職員もプロパーの方もある意味分け隔てなく、地域や町家に関わる人と関係を作れて、その関係が継続していくのが、まちセンの面白味ではと思います。

まちセンは人材のインキュベーターを目指していますが、現実はそれほど簡単ではないので、まちセンで経験を積んで、京都や他の都市でも活躍されている方とのネットワークを将来的にも持つのがいいのかなと思います。

まちづくりのネットワークと人材育成

京都のまちづくりに関わっていく人材を育成すること、あるいはまちづくりセンターがそういった皆様やＯＢの皆様、地域まちづくりの専門家などの活力を生かしながら事業を進めていくというようなことも大事かなと思っています。そういった中で私どもまちづくりセンターにもアドバイスをいただけるとありがたいです。

○北川氏

まちセン出身で、今、京都市のまちづくりアドバイザーになっている人たちが何人かいます。区役所との連携についてはずっと課題と言われ続けているようですが、せめてまちアドぐらいとは、しっかりとつながって仕事をやってもらえたらなというのは思います。

○髙木(伸)氏

関わっている人たちが強く一歩踏み出せるような状況の手助けをするのがまちセンの立場だと言われたことがあります。恐らくそれが「人づくり」だし、センターが何かに関わる時の立ち位置のような気がします。その地域に関わって皆さんと何かのつなぎ役になっていく、あるときは見守り役を輩出できる機関がまちセンだと。結果的にそれで人が育っていくし、求心力も生まれるんだろうと思っています。

○髙木(勝)氏

既存の組織や事業に、さほど縛られず動くことができ、色々な方とつながることができるのが、まちセンの魅力だと思います。それが継続すれば信頼になっていく。設立からの理念「信頼・交流・創造」の「信頼」と「交流」が起こってくると思います。

町家カルテは、コーディネーターが「わたしの家(いえ)物語」という、町家の鑑定書づくりをやってみたいという思いから、国の助成事業に申請したら採択されたことがはじまりでした。国に成果報告に行った際、まちセンのような公的機関なら、カルテのようなものを作って幅広く発信していくべきではということで、次の年からは、カルテづくりに取り組もうということになりました。１つでも２つでも常に新しいことが動いているような組織であってほしいと思います。

まちセンスタッフの心得

人と人をつなぐとか、人と場をつなぐとか、コーディネートのあり方というのは時代が変わっても変わらないのかなと思うんですけれども、交流の場づくりみたいな話で、事業を立ち上げていく、あるいは組織として新たなフェーズに入っていくときのエピソードなどお話をいただければと思います。

○髙木(勝)氏
　まちづくり専門家サロンの企画は昔からまちセンとしてされています。意識の高い人と会い、話ができ、人がつながっていくような、気軽な場が継続されるといいと思います。
○北川氏
　場があれば人がつながっていく確率は高くなりますが、それをさらに効果的にするのはコーディネーターの役割。コーディネーターはまず自分の心を開かないと、相手も心をなかなか開いてくれません。人に好奇心を持って接していくことが、非常に大事。これはテクニックというよりは心得、心構えみたいなものですけど。
○髙木(伸)氏
　自分の中に１本の軸みたいなものが見つかると、後は何とかなると思います。
○髙木(勝)氏
　一つだけ、仕事でこだわる必要があると思うことがあります。その場に行ったら、自分が主役でないのは承知の上で、単に流れに沿うのではなく、何か変えてやろうとすることです。つまり、同じ人がずっと話していたら、ちょっと割って入って、ほかの人の意見を引き出すとか。次のまちづくりの担い手になると思う人を引っ張り出して話をするとか。そういう一歩踏み込んだ働きかけは、コーディネーターの仕事としてすごく重要だと思っています。
○北川氏
　仕事をしていると、「自分がやりたいこと、わしらにやらそうとしてるんちゃうか」と思われることがあります。気をつけないとだめですよね。知識や経験がついてくるとやりたいこともいろいろ出てきますが、あくまでもその地域の人たちが、幸せと感じる発展とは、未来とは何かということがまちづくりの肝です。そのために貢献することこそが仕事。ここがやっぱりぶれないことが必要かなと。
○髙木(伸)氏
　やらされ感や押しつけ感みたいなものだけは、絶対に持たれてはいけないなと思います。
　とにかくアンテナを張ったほうがいい。現場に飛び込んで、つながりを持って、積み重ねていくというスタンスかなと。いい意味のお互い様。持ちつ持たれつ、ウィン・ウィンですよね。そういうのが長続きすると思うんです。
○北川氏
　地域に入ると多様な意見があったり，いろんな個性の人がいたりとかが見えてきますよね。まずそういうのを楽しいと思える感性ですよね。自分がそこで動くことで，地域が動いたとか変わったとかというのを見ると，やっぱり楽しいですよ。

これからのまちセンに期待すること

「２０周年」を迎えたまちセンが、今後何をなすべきか。京都のまちづくりがどうか、まちがどういうふうになっていったらいいかなどについて一言ずついただきたいと思います。

○髙木(伸)氏
　多様性を自分の豊かさと受けとめて楽しい京都になっていくのか、実践の時を迎えているのがこれからの１０年。そこに皆さんは自分の腕前を発揮できるわけです。自分のやりたいことは何か、よく考えて、それを実践してほしいと思います。
○北川氏
　まちセンの仕事の本質は、人がまちに関わっていく状況をどう作り続けるかでしょう。目指しているところはそこだということは、忘れないでいただきたいと思います。
　協働というキーワードがあります。みんなで１カ所に集まって同じことをするだけではなく、共通の目標を目指して、いろんな人がいろんなやり方でいろんなところで動くということもここには含まれます。まちセンのアプローチでできることも、区役所のまちづくりアドバイザーでできることもありますし、ほかにもアクターがいます。こうした人たちとの横のつながりを意識しながら仕事をしていただけるとうれしいです。
○髙木(勝)氏
　まちセンが２０周年を迎えたのはすごいことです。それぞれが全力疾走して、たすきをつないでいく駅伝のように、チームワークというものがあると思いますが、そういう組織が京都の都市計画まちづくりの中にあることがとにかくすばらしい。過去のつながりや、今の方々とのつながりの中で、こういうお話ができることがまちセンの財産だと思います。

質疑応答：実務の中での課題

○花﨑氏
　京町家なんでも相談や、有隣学区を担当しています。京町家があるまち並みでは、マンションはマイナスの存在かもしれないけれども、マンション前の広場は防災面でも役割を期待されています。そこにある意味はある、ということを共有できるようになればと思います。

図4-4-2　第2回歴代課長座談会の様子

○池谷氏
　景観・まちづくり大学やファンド感謝祭など、企画をすることが多いですが、自由にやれるのは非常にやりがいがある反面、生みの苦しみがあります。
○北川氏
　まちセンに来てから、人の営みの結果が景観になるという当たり前のことが、ある日すとんと腑に落ちました。単に、町家を１つきれいにしたところで終わるのではなく、その先に行き着かないといけない。人のまちに対する営みをどうつくっていくか。人が関わることで、まちは確実に良くなりますから。
○田中氏
「まちセンの人は居なくなっちゃうし」とよく言われます。距離感の取り方が、なかなか難しい。最初の一歩をどう踏み出すかが自分の中では課題です。
○髙木(勝)氏
　バトンタッチをされて地域に行くのも大変でしょう。自分が掘り起こして続いていくものは、モチベーションが高くやりがいがあります。自ら働きかけをして自分の地域を作ってもらってもいいと思います。
○牧野氏
　委託の事業の中で、どれだけまちセンらしい仕事に変えていくのかというところでもがいているところです。
○髙木(伸)氏
　委託をいかに自分のツールに仕立て上げていくかが肝要であるし、成果をどこに見出すかが重要になると思います。

まちセンOBからの一言

○寺本氏
　文化人類学の定説ですが、一民族にとって神話の時代は一回だけ。まちづくりも、初動期には新しいことがいっぱいできたわけです。今の人が同じことをするのは難しい。新しいアレンジを考えるほうがいいでしょう。
○奥氏
　ずっとまちセンを応援し続けたいです。３０周年までは元気でいたいと思うので、あと１０年は、新しい方向でいろいろと模索しながら頑張っていただきたいと思います。
○平家氏
　コーディネーターの皆さんが非常にしんどいというのはよく分かるが、まちセンでは自分で決めら

れることがあって、しんどい状況にあっても、もっと楽しく仕事ができるように決めるのは自分だということがあると思う。

○寺田氏

まちセンの行く末に対して、指針に近いものをお示しいただき、感謝を申し上げます。一人で頑張るより、十数人で頑張るとすごい突破力になるということを我々も経験しました。若い人の感性で自分たちらしい町並みについて考え、頑張ってください。

(3) 歴代次長座談会

財団設立20周年記念事業の一つ、歴代次長座談会を平成29年12月22日に開催しました。まちセンの事務局次長は、まちセンの中での実質的な統括役にあたります。平成19年から27年まで在職された4人の元次長に、お集まりいただきました。

座談会の出席者は、寺本健三氏、吹上裕久氏、歯黒健夫氏、上原智子氏。コーディネーターは梶山真樹次長でした。平成20年度の第3回京町家まちづくり調査から、ワールド・モニュメント財団（米国）との連携、京町家カルテ、京町家等継承ネットなどの取組、公益財団法人への移行、上京プロジェクトといった出来事を振り返っていただきました。

一つの事業から新しい関係が生まれ、それがまた次の事業につながっていった様子など、今後のヒントになるお話がたくさんありました。まちセンの必要性を外部にわかってもらう工夫のほか、民泊問題、お寺や神社周辺の景観保護など、まちセンに期待を寄せる分野についてもご意見をいただきました。

まちセンのOBや現役職員も含めて約20名が参加し、10年前から現在、未来に及ぶお話に耳を傾けました。

■日　時　平成29年12月22日（金）19：00～20：30
■場　所　京都市景観・まちづくりセンター ワークショップルーム

■座談会御出席の方々　（在任期間順）

出席者名	次長在任期間	所属（現職）
寺本　健三氏	平成19、20	株式会社京都確認検査機構
吹上　裕久氏	平成21～23	都市計画局住宅室技術担当部長
歯黒　健夫氏	平成24、25	都市計画局建築指導部長
上原　智子氏	平成26、27	都市計画局都市景観部景観政策課歴史的景観保全担当課長
コーディネーター 梶山　真樹	平成29～	(公財)京都市景観・まちづくりセンター事務局次長

本日は、この10年間に次長をされた4名の方にお越しいただきました。当時を振り返って、また、これからまちセンがどうしたらいいかというあたりを御意見いただければと思います。

10周年のときも歴代次長座談会をされたそうですね。

○寺本健三氏

寺本健三氏

10年前の歴代次長座談会では、最初の設立の苦労とか、バトンタッチのときに何があったとか、そういう話をきっとしたと思いますが、正確なことは覚えておりません。

当時のコーディネーターの方が成長されて、今、非常におもしろい仕事をされています。まちセンの役割の中で、人材育成は非常に大きなものがあると思います。

10年前には歴代次長座談会に寺田理事、平家さんも御参加されていらっしゃいました。

○寺田氏

コーディネーターの役割をまちセン全体で認識して、幅広い仕事をする必要があると言った記憶があります。色々な人との関係性を築きながらつくってきた仕事を継続していくと、さらに新しい人との新しい関係が生まれます。やっぱり人と人がつながっていくということが非常に大事だと話したような気がしています。

○平家氏

コーディネーター事業を始める時、本当に応募があるか心配でした。最初の頃は雇用期間が非常に短かったので、そんなので仕事ができるのかと議論をしたように思います。コーディネーターの方々がまちに出て、すごく頑張られたので、広がっていったのかもしれません。

第3回の京町家まちづくり調査が、平成20年10月から始まりましたけど、その時、次長としていかがでしたか。

○寺本氏

立命館大学の矢野研究室と、ほぼ全域の悉皆調査をしました。それまで調査していなかった街道沿いや昭和初期ぐらいのちょっと新しいほうの町家のエリアも全部対象に含めました。

私もしょっちゅう一緒に行き、色々な市民の方と調査をしました。

21年度からは吹上さんがこの調査を引き継ぎ、22年3月までされています。

○吹上裕久氏

その1年は、まちづくり調査で始まって、まちづくり調査で終わりました。GISの機器を持って、現場で操作しながら調査します。毎回、調査後に報告会を行い、データや写真を映し出し、「ここの町家はこういうとこがよかったので、ぜひ残してほしい」など、意見を出し合いました。

吹上裕久氏

ボランティアの方々の健康状態が心配でしたので、夏と冬はできるだけ調査時間を短くしたり、ローテーションを組むのが大変でした。

この京町家調査は、事業の広がりという面では大きなものがありました。延べ何千人ものボランティアの方に参加していただき、調査後の懇親会や反省会でボランティア同士のつながりが生まれ、そのつながりの中で「何でも応援団」ができ、「まちづくり散歩」などの新たな事業に繋がっていきました。

まちセンに来て一番最初の仕事は、ファンドの寄付拡大の取組で寄附付き商品「京町家まちづくりバナナ」のＰＲでした。バナナと京町家の取り合わせが意外だったのか、マスコミに取り上げられ、初めてテレビに出てＰＲしたのを覚えています。

まちセンのＰＲと寄付や賛助会員の拡大は表裏一体の取組で、当時、職員全体でアイデアを出し合い様々な取り組みに繋がりました。「学区のホームページ支援」「海外と連携した京町家支援」「私の家物語」「京町家カルテ」などです。

「私の家物語」は、歴史ある京町家の履歴書で、それを少し簡易版にして、「京町家カルテ」が生まれました。カルテの取得が改修時の金融機関からの借り入れに繋がることになり、一気にヒットしました。

組織運営で心がけられたことを教えて下さい。

○吹上氏

まちセンが公益財団法人に変わっていく時期で、仕組みとか定款とか、まちセンそのものがどうあるべきかという議論をずっとしていました。

24年から公益財団法人に移行し、その時から歯黒さんが次長になられたということで。

○歯黒健夫氏

歯黒健夫氏

賛助会員の寄附の協賛金が税額控除されることが当初からわかっていたんですけど、いざ始まっても直ちにそれが認めていただけなくて、所管している京都府さんに何回か足を運びました。

理事会と評議委員会も委任状が認められなくなり、3分の2が出席しないと会そのものが成立しないというかなり厳しい要件になりました。日程調整も大変でした。

次の25年度は、米国「Travel＋Leisure」誌「2013グローバル・ビジョン・アワード【文化部門】」、第2回まちづくり法人表彰「まちの活性化・魅力創出部」の国土交通大臣賞と2つ受賞しました。

○歯黒氏

国土交通大臣賞は、当時の三村理事長に授賞式に出席いただき、私は同行できませんでしたが、まちセンにかかわっておられた方々から、喜びのメールをたくさんいただきました。二つの受賞は、今までのまちセンの地道な活動が評価されたものです。「Travel＋Leisure」ではその後も、京都市が世界で最も人気の高い観光都市として紹介される出来事がありました。西井さんが全文英文で応募されたワールド・モニュメント財団の助成など、今も継続、発展しています。

京町家等継承ネットについてお聞きします。25年には組織立ち上げを準備されていたそうですが、きっかけは何でしたか。

○歯黒氏

まちセンならではのプラットホームがあった方がよいということで、もうまさしくオール京都で、財界、経済界、あと不動産、建築、施工関係、金融、弁護士、行政書士、様々な団体、ＮＰＯの方々にも参加していただきました。それぞれの団体が強みをもち寄ってネットワークを組み、京町家を継承しようということでした。寺田専務の熱い思いもあったと思います。

利害調整といいますか、そのあたりで御苦労されたこともあったのではないですか。

○歯黒氏

色々な方と知り合えるというか、直接お話できますので、ありがたかったです。

26年からは京町家等継承ネットが立ち上がりました。当時のことをお願いします。

○上原智子氏

上原智子氏

私が26年に色々な団体にお願いに行った時は、前年度までにご苦労いただいたおかげで、もう大分ほぐれていて、「そしたらやろか」というようなことで進みました。設立総会は京都市長や各団体のそうそうたるメンバーに集まっていただきました。これだけの人がいたら、町家の継承もどんどん進むのでは、と期待しました。

10周年の資料には、かなり企業回りをされたと書いてありました。人と人とのつながりを求めて、外に行くのがやっぱり大事なんでしょうか。

○上原氏

味方になってくださる人は、すごく大事です。まちセンにはそれまでの信頼や実績がありましたので、引き続きかかわってくださる方もたくさんいらっしゃいました。「京都のまちセンです」と言うだけで、講演を引き受けてくださる方もいらっしゃいましたし、まちセンの冠の強みはものすごく感じました。

26年に、新たに上京プロジェクトを始めました。

○上原氏

中期経営計画で、まちセンの強みや、まちセンだからできることを模索していた中で、新しいネットワーク、新しいフィールドをつくるのは大事だということで始めました。新しい地域や、地元組織ともつながりながら、一方で地縁はないけれども、その地域のよさを感じてクリエイティブな活動をしている方たちともつながりをつくりました。そのつながりを継続し、まちづくりの専門家もどんどん新しい人に広げていきました。そのまちを構成する町家にかかわる人と、町家の専門家を事業の中でコーディネートして、その方々が何かやったら新しいことが生まれるという趣旨で、上京プロジェクトを始めました。

27年度からは、クラウドファンディングが新たに始まりました。

○上原氏

クラウドファンディングのもとになった「まちづくりファンド」を民間都市開発推進機構が整備されていて、「ぜひ京都の京町家で使ってほしい」ともちかけられました。これもものすごく苦労しました。それまでの寄付型の「京町家まちづくりファンド」に加えて、初めて投資型というものを選んだのですが、まちセンがリターンを得る場合がある点が収益事業になるとか、公益財団法人としてそぐわないと言われ、京都府の公益財団法人の担当とは、むちゃくちゃけんかしました。この事業をもちかけてきた国交省とか小笠原副市長を巻き込んで、色々な所に声をかけて何とか認めてもらうことに落ちつきました。

視察にいらっしゃった方にクラウドファンディングの話をしますと、皆さんご興味を示されます。非常に先進的な取組だと思います。

ここからは、これから10年どうするべきかを、議論できれば。まちセンとして何をテーマに取り組んでいったらいいか、アイデアをいただければと思います。

○寺本氏

人間や組織との関係など、まちセンのこの今までの蓄積をどんどん伸ばしていけばいいのではないでしょうか。まちセンが都市問題全てに対応できるなんていうことは、あり得ないと私は思います。

まちセンの仕事は、今まで誰もやったことがないようなことをやるという。トップアップという言葉があるかわかりませんけれど、先進的なことをやって、それがほかに波及すれば良い。コーディネーターの人とか、優秀な若い人がたくさんいて、新しいアイデアをたくさん出してくれるんですよね。

町家カルテのもとになった「わたしの家物語」ですが、浜谷さんが最初に町家の物語をつくろうとしたときのことを知っています。10年間で色々アレンジされていると思いますが、アイデアの芽を育てていった結果だと思います

最近、大きな町家の相談が多いそうですね。これは重大な話で、大きな町家に住んでいる人たちがいるから、何とか京都は保っているんですよ。町家に愛着を持ってずっと住んでいる人、所有している人が窮地を訴えてきたときにこそ、何か手を差し伸べるようなことを考えなければという気がします。それがだんだん危うくなってきているのかもしれません。今この時点で食いとめないと、形だ

けは残るけど、中身はなくなっちゃうかもしれない。そういうことをいち早く察知して、対処することを考えたらいいのではないでしょうか。

○吹上氏

人口減少や少子高齢化といった都市の課題が顕著になってきていることから、どうしたら住みよいまちになるのか。どうしたら住み続けられるのか。もう少し、そういうところに入っていってもいいと思います。

まちセンの事業は、波紋が広がるように、一つの取組が、次の新たな取組を生み、また別の事業に影響し、という具合に繋がりながら広がっていくという経験をしてきました。繋げていくのはコーディネーターさんです。

これまでの事業の繋がりを紐解いていくと、事業の繋がりや人の繋がり、まちセンの力の強さがわかるのではないかと思います。

民泊もテーマとして取り上げたらどうだという意見があります。

○歯黒氏

今年の6月に国で新しい住宅宿泊事業法という民泊新法ができ、来年6月15日から施行されますが、国の法律のままでは、京都の宿泊環境がだめになると危惧されています。昨年に掲げた京都市上質宿泊誘致方針では、基本的に京都はしっかりとおもてなしをする。また、色々な地域の特性を観光客の方に体感していただくとしています。

この民泊問題について、髙田先生は地域がどうかかわるか、地域の思いがどうなのかというのが非常に大事だとおっしゃっていました。

地域の皆さんの考えによって、地区計画や建築協定で粗雑なものは排除することができます。去年11月の区民版にそういう折り込みチラシを入れたら、結構反響がありました。地域の皆さんが民泊を契機に、自分たちが暮らす地域を住みよいまちにするため、1つのツールとして興味をもっていただくことが大事です。まちセンのコーディネーターの皆さんは、そういうような地域がたくさんありますので、サポートをしていただけたらありがたいです。

景観というちょっと又違った視点からお願いします。

○上原氏

まちセンの次長の後、京都市役所に戻って、寺社とその周りの景観をどうやって守っていくかという仕事をしています。観光客でにぎわっているところもありますけど、まちそのものの魅力は、規制や助成だけでは守れないと思っています。例えば、伝統的建造物群保存地区では、建物の様式を規制したりその代わり手厚い助成がありますが、建物を相続された人が、もう面倒を見られないとおっしゃっていたり、まちとしての力が弱まっているところもあります。やっぱりその地域の魅力を感じられる人に、ちゃんと入ってきて、まちづくりの担い手になってもらうことが大切です。

郊外にもそういうところはたくさんありますし、まちにも、ものにも、人にもかかわれるまちセンの強みを、いかしていただく地域はまだまだあると思います。

ビジョンを実現するためのコーディネートができるのはまちセンだけだと、すごく今思っています。

図4-4-3　歴代次長座談会の様子

大島理事も何か一言。

○大島氏

前半お話になった組織の悩みについて。私は岡崎の方のエリアマネジメント組織のマネジャーをしていますが、実は、まちセンと同じ悩みを抱えています。組織として、どういう役割を果たしていくかが問われますが、悩み続けながらやるしかないと。時代のニーズを受けながら、いかにフレキシブルにサポートしていくかにつきると思いました。

最後に、初代次長の寺田理事にお言葉をいただければ。

○寺田氏

京都がもっている資源を最大限いかして、その空間が美しくなる。空間だけ美しくなるなんていうことは絶対できなくて、そこへ人なり事業が入ってきて初めて空間が整備されるわけです。空き家もないだろうし、景観もよくなるし、コミュニティもよくなる。これはもともとのまちセンの発想ですし、そのためのネットワークで、みんなにやってもらう。それをどうつないだらできるか、まちセンはネットワークでいきるという意味はそこだというふうにずっと思っています。ただ、時代時代に行政だとか、ネットワークの組み方だとか、今そこでぐっと時代をリードしているような価値概念だとか、そこをセンシティブにキャッチして、波乗りサーフィンという言い方は妙ですけども、いつもこのトップの上に居続けていくというこのあがきがまちセンの今日をつくってきたと思います。

そのためにスタッフの方々はアンテナを張って発信をしてリアクションを受けとめるということはやっていただきたいと思います。

「京町家まちづくりファンド（以下、ファンド）」は、歴史都市・京都の文化の象徴である京町家の保全、再生、活用を促進することにより、京都固有のくらしの文化、空間の文化、まちづくりの文化の継承と、京都らしいまちなみ景観の保全を目的とした事業です。（2-3 京町家まちづくりファンド　参照）

平成17年、京町家の減少に心を痛めた篤志家からのご寄附と、市民の皆様、企業、京都市、国からの支援を原資に設立された基金で、平成18年に運用を開始しました。

今年度は財団設立20周年の関連企画として、ファンドにご支援いただいている皆様に事業報告を行う「ファンド感謝祭」とあわせて、京町家の改修事例を見学していただける「ファンドオープンハウス」、京町家の冊子（「京町家物語」）の作成を実施し、「京町家まちづくりファンドまつり」と銘打ち、規模を拡大し開催しました。

「京町家まちづくりファンドまつり」として実施された事業

（1）京町家まちづくりファンド感謝祭（2/10）
（2）ファンドオープンハウス（これまでに改修助成を受けられた5軒の京町家の見学会）
（3）「京町家物語」（上記5軒の京町家の由緒や沿革、現在の暮らしぶりなどをまとめた冊子）の作成

（1）京町家まちづくりファンド感謝祭

■日　時　平成30年2月10日（土）　13時30分～16時
■場　所　同志社校友会　新島会館本館2階大ホール
■プログラム
① 話題提供：大場修氏（京町家まちづくりファンド委員会委員長、京都府立大学大学院教授）
② 事業報告：野間久世（まちセン事業第二課長）
③ ゲストスピーチ：寺島彰氏（平成23年度選定／上京区）・森紗恵子氏（平成26年度選定／上京区）
④ 感謝状贈呈：（個人）西村孝平氏・（企業）岡本秀巳氏（株式会社都ハウジング代表取締役社長）・坂本登氏（京都青果合同株式会社 調査室室長）・杉野善彦氏（株式会社井筒八ッ橋本舗 代表取締役社長）

⑤　ご挨拶：門川大作氏（京都市長）・寺田一博氏（京都市会議長）
⑥　記念講演：彬子女王殿下（一般社団法人心游舎 総裁）
⑦　アトラクション：（立方）若柳 佑輝子氏、（長唄）今藤 小希郎氏、（三味線）杵屋 勝進良氏、杵屋 禄秀（池谷憲彦：まちセン職員）

■参加者　　89名

①話題提供　大場修氏

大場修氏

京町家の歴史をたどりながら、その価値をえ、ファンドの意義や果たすべき役割について話題提供していただきました。

京町家まちづくりファンドの意義と役割～「織屋建て」の京町家を巡って～

京町家には1000年の歴史があり、日本の各都市の町家に影響を与えました。ファンドでも改修事例の多い織屋建てに見られるように、京町家の多様性や残存している多量性は木造の都市住宅として世界史的に類がなく、世界遺産的価値も持っています。それらを次代に継承するファンドの意義と役割として、「伝統的価値」の再生だけではなく、「現代的価値」の創生も担っています。

②事業報告　野間久世

平成29年度のファンド事業の事業報告として、1月から2月にかけて行われたオープンハウスの様子や、新規の寄附付き商品の紹介、平成29年度の改修助成として４件選定されたことなどが報告されました。

図4-5-1　事業報告の様子

③ゲストスピーチ　寺島彰氏、森紗恵子氏

これまでに改修助成を受けられた方の中から2名の方に、京町家での生活にいたる経緯や、現在の住まい方等の事例を通して、京町家の魅力についてお話いただきました。

〈寺島彰氏〉

寺島彰氏

京町家ならではの簡素な佇まいの中で、日々の生活を通して感じることは、四季の移ろいを町家が教えてくれる事でした。また素人なりに手を掛けて向き合うことを楽しみながら、心やすらぐ空間を作れるのが京町家だと思います。

図4-5-2　森紗恵子氏のスピーチの様子

〈森紗恵子氏〉

伝統産業の織物職人としての独立をきっかけに、織屋建の京町家を改修して工房兼住まいにしました。多くの若手の職人さんに京町家を活用してもらう「仕組みをつくる」ことが、伝統産業の活性化や、京都の魅力向上にもつながると思います。

④感謝状贈呈式

平成29年高額寄附者の代表として、1個人、3企業の皆様に感謝状を贈呈しました。

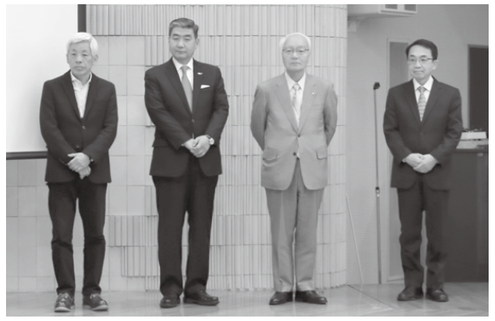
図4-5-3　高額寄附者の皆様
（左から）西村孝平氏・杉野善彦氏・岡本秀巳氏・坂本登氏

<寄附者代表挨拶>

個人寄附者代表：西村孝平氏

企業寄附者代表：杉野善彦氏

⑤ご挨拶

門川大作市長

寺田一博議長

⑥記念講演

彬子女王殿下（一般社団法人 心游舎総裁）

「伝統文化を未来に伝えるために～心游舎の取組と日本文化への想い～」

「心游舎では、未来を担う子供たちが気軽に集まり、楽しみながら、生きた文化を自ら体験するワークショップに取り組んでいます。現代は、日本の伝統文化が生活から離れてきています。「文化」というものは生活の中に息づいてこそ文化です。伝統文化とは、保存するだけではなく、生活の中に取り入れて活かしていくことが、私たちが未来のためにしていくべきことだと思います。」

京町家の保全・再生・継承、そして、京町家とともに育まれた暮らしの文化の継承に共通のテーマとして、参加者の皆さんの関心も非常に高く、熱心に聴かれていました。

図4-5-4 記念講演の様子

彬子女王殿下

また、心游舎の活動の舞台となった太宰府天満宮参道のまちづくり事例や、地域の祭礼の事例から、地域や行事への愛着や誇りなどの想いが人を動かし、大切なものを伝える原動力になるという、伝統の継承とまちづくりのつながりについても論及されました。

⑦アトラクション

ご来場の皆様の健康とご多幸、京町家・まちづくりの益々の発展を祈って、「七福神」「君が代松竹梅」の演目が披露されました。

図4-5-5　長唄「七福神」

図4-5-6　長唄舞踊「君が代松竹梅」

(2)ファンドオープンハウス

実際にファンドを活用して改修された京町家(5軒)の見学会を開催しました。

各家庭の季節の室礼を楽しみながら、所有者・居住者から直接、改修の経緯や住まい方の工夫等のお話を伺うことにより、これから町家の活用・改修を考えている方や生活している方との情報交換と交流の場になりました。

また、単なる見学だけでなく、京町家の歴史とともに生活に彩りを添えてきた伝統文化の体験企画も開催されました。

ファンド事業の成果と意義を広く発信するとともに、それぞれ特色の異なる京町家を見学することにより、京町家の多様性を味わい、生活の知恵を共有する機会になりました。

①小西邸

(平成24年度選定・伏見区／景観重要建造物)

1月20日(土)13時～16時　蔵のお掃除体験　参加者:9名

2月3日(土)13時～16時　邦楽鑑賞体験　参加者:23名

図4-5-7　小西邸

図4-5-8　小西邸の蔵

(平成18年度選定・東山区)

1月21日(日)13時30分～16時30分

お抹茶体験　参加者:29名

図4-5-9　河崎邸

図4-5-10　お抹茶体験の様子

③寺島邸

(平成23年度選定・上京区)

1月28日(日)13時30分～16時30分

参加者:58名

図4-5-11　寺島邸

図4-5-12　見学の様子

④谷村邸

(平成26年度選定・上京区／歴史的風致形成建造物)

1月28日(日)13時30分～16時30分

機織り体験　参加者:68名

図4-5-13　谷村邸

図4-5-14　機織り体験の様子

⑤伊藤邸

(平成23年度選定・南区)

2月4日(日)15時～16時30分

京町家再生セミナー合同開催　参加者:18名

図4-5-15　伊藤邸

図4-5-16　見学の様子

4-6　新春公開座談会「夢を語る―京都の景観・まちづくり・京町家」

(3)「京町家物語」(上記5軒の京町家の由緒や沿革、現在の暮らしぶりなどをまとめた冊子)の作成

ファンドオープンハウスにご協力いただいた上記5軒の京町家を、「活用・住まい方・まちづくり」という視点を中心に一冊の本にまとめました。

改修前からどのように変わり、現在はどのように住まわれているのか、感じておられるのかをまとめることで、改修助成事業の成果と意義を形として発信するとともに、これから町家の活用・改修を考えている方々へ次のステップとして参考になるような本となるものです。

また、オープンハウスの際には、公式ガイドブックとして、所有者・居住者の皆さんのお話をさらに深く理解するのにも役立てられました。

図4-5-17　京町家物語

※「京町家物語」は、まちセン窓口にて、1冊200円で販売中です。

この本の売上は、全額、京町家まちづくりファンドへの寄附となり、京町家の再生支援に役立てられます。

図4-5-18　所有者へのヒアリングの様子

まちセンの設立当初、評議員にご就任いただき、現在も役員をお務めいただいている5人の方たちにご登壇いただき、設立20周年を記念した「新春公開座談会」が1月13日に開催されました。まちセンの20年間の事業やご自身の専門の領域から、京都のまちづくりについて振り返り、これから理想とされるまちづくりについて語り合っていただきました。

■日　時　平成30年1月13日(土)14:00～16:00
■場　所　ひと・まち交流館　京都　2階　大会議室
■登壇者　栗山 裕子氏(WIN一級建築設計事務所主宰(一社)京都府建築士会監事)
髙田 光雄氏(京都美術工芸大学教授(工芸学部長)　京都大学名誉教授)
長谷川和子氏((株)ケイアソシエイツ代表(株)京都クオリア研究所取締役)
宗田 好史氏(京都府立大学副学長和食文化研究センター長)
進行役　東樋口 護氏((一社)住宅長期支援センター理事長　公立鳥取環境大学名誉教授)
参加者　122名

○東樋口氏

本日の座談会は、新春公開座談会と銘打っております。これまでの20年を振り返り、これからの20年を見通した夢を展望してもらいたいということです。まず、これまでの20年について。

○栗山氏

私は個人で設計事務所を40数年やっています。そのうち半分ぐらいは、まちセンさんとおつき合いをしてきました。バブル経済の頃、このままでは、まちがまちとして機能しなくなるという危機感がありました。そこで仲間と「古材バンクの会」を立ち上げ、まちづくりセンターとも関わるようになりました。

京都市は今、町家を守ろうと、条例化などに取り組んでいます。その元になったのは、まちづくりセンターの地道な努力。一番の成果だと思っています。

栗山裕子氏

髙田光雄氏

長谷川和子氏

宗田好史氏

東樋口護氏

ただ、景観に関する見方が変わってきた今、もっと京都市全体の景観にまで踏み込んでもよかったと思います。

○髙田氏

この20年は、バブル崩壊の後遺症の治療からスタートしました。当時、京都の都心はマンション紛争の激戦地でした。ただ、本質的な問題はディベロッパーと住民の争いにあるのではなく、社会経済環境の変化の中で都心部の地域コミュニティに亀裂が入り、それが修復困難となっていることでした。単に地区計画や建築協定の制度をつくるだけでは問題は解決しないということも、現場で痛感しました。

ただ、激しいマンション紛争が起こった姉小路界隈のまちづくりの現場に、できたばかりのまちセンから派遣され、貴重な経験もしました。信頼関係が失われた異なる価値観の人々が、外部の専門家を含めて24カ月間熟議する中で、新たな価値観の発見や共有が実現したのです。

そういう議論の最中に、まちセンの現理事長の青山先生が座長をされて、京都市都心部のまちなみ保全・再生に係る審議会が開かれました。

そして、2002年に短期的な方策と長期的な方策の2つの審議会提案が京都市に提出されました。短期的な方策は、マンション紛争を食いとめるために厳しい建築ルールを課すこと。長期的な方策は、地域で考え、地域でルールを作っていくことです。まちづくりの地道な活動を育てないといけないと。

この審議会提案は両方とも京都市の景観まちづくり施策となりました。その後、2004年に国の景観法ができ、2006年に京都市の景観づくりの審議会がまちなみ審議会提案も組み込んだ答申をまとめ、2007年に新景観政策が生まれました。15年前のまちなみ審議会は、まちづくり政策を景観政策に結びつける重要な役割を果たしたといえます。

○長谷川氏

私は浜松出身で、京都に住んでもう50年になります。いけずだとか、自らの考えをあまり表に出さない京都人とどうやって付き合い、仕事をするか随分悩んだ時期がありました。そんな時、堀場製作所の創業者の堀場雅夫さんが「突き抜けろ」とおっしゃいました。曖昧な適当な話をするのではなくて、突き抜けろ。これが私が京都で暮らすにあたっての課題解決であり、自分の生きる指針となりました。中途半端はダメ、を教えていただきました。

KBS京都時代、もう4半世紀前になりますが平安建都1200年を前に、これからの京都づくりをテーマに「どうなるトーク・京都」という生討論番組に取り組みました。コメンテーターを堀場さんと国際政治学者の高坂正堯さんが務め、スタジオにおける討論と並行して電話とFAXで寄せられた意見や提言に、高坂さんは、「偉い人の話ではなく、京都市民の力はすごい」と話されていました。

その後、21世紀を前に「どうする京都21」という討論番組をスタート、景観問題や京都駅前の再整備、失われる京町家、環境や産業振興、大学の役割など、東京の対極にある京都が抱える課題とその解決策についての議論を続けました。

ほぼ同時期に、まちセンがスタートしているの

ですが、まちセン活動の一番のポイントは，研究者をまちづくりに引っ張り出したことだと思います。多彩な研究者をつなぎながらネットワークをつくる、当時のまちづくりと言えばハード中心でしたが、ソフトをベースにしたのも大きなポイントでした。

○宗田氏

京都に来て、今年の夏で25年たちます。そのうちの20年間、まちセンと色々なまちづくりをご一緒しました。

先ほどのまちセンの歴史のスライドの中で、市民、事業者、行政とのパートナーシップという言葉が出てきました。

まちセンがこの20年間、パートナーシップをどのように進めてきたかを整理すると、まず市民でなく「住民」でした。京都市全体で市民、住民とのパートナーシップを進めてくる中で、まちセンの20年間は、特に地域の「住民」とのパートナーシップを大切にしてきました。

次の事業者とのパートナーシップも重要です。京都市は経済界とのパートナーシップが上手で、景観政策もそうですが、観光、文化、福祉に関しても、さまざまな企業とパートナーシップを進めています。事業者、企業、経済界との連携という点では、まちセンには限界がありましたが、同時に隠されている大きな可能性、次の発展の可能性はそこにあると思います。

3つ目が行政です。国とのパートナーシップに関して、京都創生の取り組みを始めて15年がたちます。文化、景観、観光という3つの柱を立てて、京都市を支える手だてを打ってきています。中でも景観政策に果たしたまちセンの役割は特に大きいといえます。

この20年間、京都の都心で、バブル経済崩壊後の大きな変化が次々と起こり、住民と事業者の関係は昔のような職住一体ではなくなり、簡単に協働できなくなりました。だから、行政が間に入って住民、企業、行政のパートナーシップという形で、地域のまちづくりや、京都市全体の大きなレベルのまちづくりを進めました。その点では一定の成果がありました。

ただ、もっと大きなレベルでの共生が考えられるだろうと思います。2040年には全世帯に占める一人暮らしの割合が4割以上に達するとみられ、地域社会がどう変わるのかが大きな課題です。住民の7～8割がマンションに住んでいる元学区もあり、今はマンションに住む人たちがどういう形でまちを支えるかという話になっています。これまでの20年と、これからの20年を大きなフレームで捉え直すべき時期にきています。

○東樋口氏

まちセンが、パートナーシップの推進に対して果たしてきた役割はどんなものだったのでしょうか。

○宗田氏

メディエーターとしての役割でした。まず、様々な機会を提供し、仲介する人を大量に招き、育てたことだと思います。まちセンの出身者が卒業後、色々なところで活躍しています。

○東樋口氏

パートナーシップはどの段階に来ていますか。

○宗田氏

京都の市民力には知恵と力が具わっています。この市民力が十分に発揮される域まで達しているかと言われたら、まだですよね。京都の市民力はもっと深く、もっと可能性がある。京都の事業者の方たちが持つ可能性はもっと大きい。それがイノベーションとも関わってくる。次の目標にしてほしいと思います。

○東樋口氏

景観とまちづくりをセットにした取組について、栗山さん、お願いします。

○栗山氏

20年前、組織の名前に「景観」をつけたのは、まちセンが行くべき方向を見定めていたのだと思います。景観を維持するため、京町家をキーワードにしてまちづくりに取り組み、それが京都市の施策に転化されていったのは、まちセンが先駆して1戸1戸の建物に向き合ってきた成果だと思う。

ただ、町なかだけに特化してしまって、隣接するまちや周辺に目が向かなかった。もっとグローバルな感じでやっていかないといけない。町家は大きな要素ですけど、市域には近代建築もあれば、もっと違う民家型の建物もある。色々な建物が織りなす京都のはず。まちセンにはこれから、「景観」を太文字で書くぐらいのセンターになっていただきたい。

図4-6-1　新春公開座談会の様子

残念なのが人材の不足。まちづくりは、日の目を見るまで10年、20年かかるのに、まちセンの職員が3年、5年でころころ変わる。宗田先生は「色々なところで活躍されている」とおっしゃいましたが、まちづくりコーディネーターさんのような優秀な人材は京都の中でもっと長期に頑張ってほしい。

○長谷川氏

1200年の都である京都で育まれた町衆の知恵、これは京都の財産ですが、近年その力が落ちてきていることを痛感しています。京都の市民力を高めることは緊急のテーマです。

京都は歴史的に見ても世界に開かれた都市であり，世界中から様々な情報や人材を受け入れてきました。そして国内の人財もうまく取り込みながら、足りないものを補完してきました。最近では、京都が大好きで毎年京都を訪れ長期滞在する観光客、またサバティカル休暇で半年とか暮らす研究者もいますが、こういう長期滞在者への視点が欠けている感じがします。

京都という盆地の中でグローバルを考えるのではなく、世界は京都をどう捉えているのかを捉えることによりグローバル社会における京都の役割が見えてくるのではないでしょうか。そのための仕掛けをどうするのか、研究者をはじめ外部の人間の協力が不可欠です。

まちセンは、みなさんが集まる場です。意見や考えの違いを超えた広範な討論や活動を大いに期待したいです。

○東樋口氏

前半の議論について何か補足、あるいはご意見はありませんか。フロアの方もどうぞ。

○フロア男性Ａ氏
町内会が非常に疲弊してきています。私にとっては一番の問題です。

○髙田氏
京都で蓄積されてきた生活文化を継承したり、発展させたりすることが難しくなっています。今、生活文化を継承、発展させるため、何をしなければいけないかを考えなければいけない時期にきています。
京都は、ほかの地域に比べると、価値観の違う人が、共存しながら生きていくための知恵がより多く蓄積されてきたところです。例えば、異なる価値観の人々が、連担のルールを守って家を建てることが、結局は個々の家の快適性を最大化することを長い歴史の中で学び、今の町家の形ができています。あるいは、三条通には色々な時代の建物が並んでいます。そこに楽しさがなぜあるかというと、異なる価値観を共存させる作法が隠されているからです。京都のまちは異なる価値観の共存という生活文化が具現化しているところなのです。
京町家の保全・継承は、こうした生活文化の継承と発展のためにやるのだと確信しています。異なる価値観の共存技術がなかったら、外の力を借りながら持続可能な社会を築くことも困難となります。地域のまちづくりを支援しなければならない所以（ゆえん）です。

○東樋口氏
今後の地域まちづくりの進むべき方向や、まちづくりを担う組織、人づくりについてお願いします。

○宗田氏
私の関心は、20年後の京都が、また地域社会がどう変わっているかということです。
京都は、フェアなソサエティをつくることが得意なところ。協働することでみんなの利益が最適化、そして最大化されます。
京都では、誰か一人が高いマンションを建てて利益を独占したらアウト。でも、みんなが少しずつ我慢できるルールがあれば、みんなが豊かに、そして京都もよくなるという発想で、景観政策も、文化政策も、観光政策もできています。
町並みの美しさは、まちの構成員が社会をつくるための文化的な協働作業の成果が表れたものです。協働に対する倫理観、規範をお互いが共有し、信頼関係を築き、目に見えないルールを作る。今では町家が再生している京都に来てビジネスをする動きが盛んですが、社会の力みたいなものが町並みの中に表れているからだと思います。でも、これを外の人に伝えるのは難しい。
我々が町家を再生し、景観を守るのは、そういう社会の規範が表れたものを次世代につなげたいからです。それが実は社会、経済の根底にある原理だからです。この辺がまちづくりの規範として整理できて、諸外国にもまちづくりのモデルとして示せようになると、観光、文化、共生、産業再生、創造性と言っていることの根底がきっちり描き説明できると思います。
これから20年、まちセンの活動は、今の京都のまちづくりの文化の本質的なものを見出す方向に進むだろうと思います。

○長谷川氏
日本の社会そのものが縦割りになって、たこつぼ化しています。異なった価値観をどうお互い認め合うのか、考えの違う方々と顔を合わせてどう交流をもつのかというところに，まちセンの1つの役割があると思います。
違う人種、違う宗教、違う文化を共有する場として京都があり、その形として景観やまちづくりがあることを意識して、進めていただきたい。そのためにはマネジメントする能力が問われてくると思います。エリアマネジメント、あるいは産業マネジメント、様々な意味でのマネジメント能力を持っている方々がこの場に集まる。
文化，経済，理・工学といった研究者の方々にも入ってきていただきながら，新しいイノベーションをこの京都のまちから起こしてほしいです。

○髙田氏
京都でよく、寒さをしのぐ、暑さをしのぐ、といいますよね。しのぐとは、我慢することではなく、ネガティブなものをポジティブに変換することです。
ネガティブなものと向き合ってポジティブなものをつくっていこうという考えが、京都の生活文化の本質的なところにあり、それが結局異なる価値観の共存につながっている。
そういう力を蓄積していかなければいけませんが、そのための環境が戦後、急速に壊れてしまった。今ならまだ修復可能だと思います。異なる価値観の共存を可能にする環境を整備することが、まさにまちづくりの支援だと思います。
次に、計画という概念があまりにも行き渡り過ぎていますが、決めなくてもいいことは決めないことが大事だと思います。次の世代にどれだけ多くの選択肢を残すかが重要で、20年後どうなったらいいかというようなことは、1つに決めないほうがいい。多様な選択肢を探すことが重要です。
そして、子どもの問題。我々は戦後の開発で、子どもたちが歴史的に蓄積された生活文化を体験する可能性を奪ってきました。我々が奪い取ってきたものを再生していく。あるいは、今現在残っているものを継承して発展させていく。こういうことを今やらなければと思います。

○栗山氏
まちセンは20年後もあってほしい。まちセンの役割は、現実のまちの中に入っていくわけですから、そういうところの情報がまず集まってくる。それを行政につないで施策にいかしてもらえる所だと思います。
20年たって、京町家条例などが日の目を見てきたわけですけど、それも毎日の地道な力があってこそ、まちの人と話をする場所があったからこそ。もっと色々な立場の人がここに集まるような素地をつくって、つないでいただきたい。
それともう一つ、京都は住まい手にすごく冷たい。町家や空き家の補助金など、事業者には色々なサポートがあるけど、新しく住む人に対する支援は何もない。若い人たちを受け入れて、住まい続けていけるような支援がほしい。主に行政へのお願いですが。

○東樋口氏
ご意見のある方。時間がないので1人だけ、どうぞ。

○フロア男性Ｂ氏
質問じゃなくて、意見です。例えば財政支援はどうなのか。また、イタリアの事例を手本に、町家をどうするべきかを、もうちょっと検討してください。すぐ答えてもらわなくて構いません。

○東樋口氏
もっと勉強を進めてくださいというおしかりだと受けとめたいと思います。
一言まとめをします。まちセンは価値観の共有から出発し、共有の過程の中で、それぞれの経済的な価値、文化的な価値を確認しながら、パートナーシップの手法を確立してきました。教育、まちづくり、町家など、まだまだ頑張らないといけない問題はありますが、次の20年の役割は、異なる価値観をもつ者同士が、どのように協働していくかという次の段階を目指すことがよかろうというのがパネリストの皆さんのご意見だったと思います。